

加古角洲吐方撮要攷

館野 正美

日本大学文理学部

“吐方”とは、所謂“汗吐下”三法の一つで、催吐剤を用いた治術であり、古く『黄帝内経素問』や『傷寒論』に濫觴を浮かべる。我が国では、先ず奥村良築が嚆矢を開き、永富独嘯庵や荻野台州らを経て、吉益東洞や恵美三白らによって臨床的に多用され、中神琴溪や、その琴溪門下の加古角洲や三白流を受け継ぐ松田直らによって発展的に継承され、遂に喜多村良宅の『吐方論』(1817)において、体系化され、理論化されるに至り、その後更に渡邊君耀によってその後の様相が綴られる、日本漢方中の一つの伝統である。今回は、この江戸時代における吐方の実際と理論の一樣相としての加古角洲の『吐方撮要』の内容を垣間見てみたいと思う。

加古角洲(天明5(1776)年—天保3(1832)年)、名は坎または尚寿、字は公山、角洲と号する。阿波の人で、大阪に居住する。吉益東洞を奉じ、その嗣子の吉益南涯や、更には中神琴溪について医術を学んだ。東洞や南涯、延いては琴溪の医術・医論を的確に理解・継承し、己が医術の実践において敷衍し、更には、それを明確に記述することができた、極めて稀なる医家である。今茲に、『吐方撮要』の内容を分析し、角洲の医術と医論の特色を明確にし、以てその医家としての独自の境地にまで論及してゆくものである。

解析の結果、加古角洲の吐方についての記述は、丁度、琴溪による実際的な臨床を経て、喜多村良宅による冷静な理論化に至る直前——或いは、殆ど同時——における、吐方の實際を、その〈親試実験〉に基づく明快な判断の集成として今に伝えるものであった。

そこにおける角洲の記述の特質は、先ずなによりも、それが彼の並々ならぬ見立てと腕前に起因する〈親試実験〉に基づく、確固たる自負に裏付けられたものであったということである。この点で、この角洲こそ、彼が敬愛し、師と仰ぐ吉益東洞や中神琴溪らの、正に正当な後継者であると言えると思うのである。例えば、〈独嘯子特著吐方考、以伝後世、夫独嘯子者賢哲也、我何当乎、雖然、間有千慮一失、……〉(独嘯子特に吐方考を著して、以て後世に伝わる。夫れ独嘯子なる者は賢哲なり。我何ぞ当たらんや。然りと雖も、間に千慮の一失あり、……)と言って、基本的には、この道の先輩である永富独嘯庵の吐方に敬意を表しつつ、その些かの欠を補うという態度を表明しつつ、それは飽く迄も先輩に対する礼儀としての発言であり、実際のところは、決してそれを鵜呑みにすることなく、寧ろ批判的に継承するものであった。角洲のこの『吐方撮要』は、当時の吐方の実際と、そもそもそこに至るための鋭くも正確な見立ての重要性を、余すところなく伝える、好個の一書であったと思うのである。

ところで、その記述中においては『孟子』(「公孫丑上篇」)に基づく角洲のことが目を引いた。この『孟子』からの引用と言い、また『論語』・『礼記』・『漢書』等、角洲の発言は随書に中国古典の文辞を織り交ぜて構成されている。つまり、その師琴溪と同様に、角洲はかなりの読書家である。琴溪・角洲共に、中国の古典を良く読み、己が“ことば”と成していたのである。

かくして、この『吐方撮要』は、東洞・琴溪の医術を正当に受け継ぎつつ、更に研鑽を重ねた角洲の手に成る、ひとり吐方の実際だけでなく、広く古医方の——少なくとも——重要な一側面を今に伝える最重要の一書であった。ただ惜しむらくは、一書が、未だ十分な校正を経ないまま、謂わば未完の形で出版されたものであったということである。これが更なる校正・推敲の後に世に出されたものであれば、更に今の我々に裨益すること倍加に過ぎるものであったかと思うのは、ひとり筆者のみではあるまい。